

アクティブラーニングを取り入れた デザイン史教育プログラムの研究* —アール・ヌーヴォーからアール・デコへ—

高屋 喜久子[†]・三嶋 萌^{††}・安部 信行^{†††}・石毛 清八^{††††}・皆川 俊平^{†††††}

Study of Design History Education Program* - From Art Nouveau to Art Deco styles as a Practical Example -

Kikuko TAKAYA, Megumi MISHIMA, Nobuyuki ABE, Seihachi ISHIGE, Shumpei MINAGAWA

ABSTRACT

The history of modern design that began with the British Industrial Revolution in the late 18th century spans approximately 160 years. The two major epochs of design styles are Art Nouveau that began with the Arts & Crafts movement and flourished in Paris at the end of the 19th century, and Art Deco that became a symbol of 20th century modernity.

This paper discusses two design history public lectures held for the citizens of the community at the Hachinohe Art Museum. The first one talked about Art Nouveau (held on November 4, 2023) and the second one about Art Deco (held on December 2, 2023). The paper also discusses the content structure of the lectures that incorporates active learning and the results of a survey regarding the educational practical program. Further, it proposes the program's effects and possible future development.

Key Words: *design history, education program, art nouveau, art deco, hachinohe art museum*

キーワード : デザイン史, 教育プログラム, アール・デコ, アール・ヌーヴォー, 八戸市美術館

1. はじめに

18世紀後半イギリスの産業革命から始まったとされるデザイン史約160年余りの中で、19世紀末デザイン様式としてパリで華開いたアール・ヌーヴォー、続く20世紀モダンの象徴として芽吹いたアール・デコは、二大エポックを成したと言え、様式美の影響を受けた作品群を数多く残している。それらは、建築や室内装飾、美術品から日常生活用品、ポスターや書体デザインなど広範囲

* 令和5年12月1日 受付

[†] 感性デザイン学部感性デザイン学科・教授

^{††} 感性デザイン学部感性デザイン学科・科目等履修生

^{†††} 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

^{††††} 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

^{†††††} 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

にわたって影響を及ぼし、100年以上を経た現在でも使用されているものが多くある。アール・ヌーヴォーの旗手と言われる、アルフォンス・ミュシャ（1860-1939年）に関しては、チェコの首都プラハに「ミュシャ美術館」が2000年に開館、日本でも大阪堺に「ミュシャ館」が1998年3月に開館しており、その人気の高さは今もおとろえることを知らない。

一方、アクティブラーニング¹⁾は自己の学習活動を振り返って次に繋げる「主体的な学び」、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」、問題を見出して解決策を考え、創造する「深い学び」を実現できるものとして、大学教育において導入を推進してきたものである²⁾。

2. 研究の目的と既往研究

本研究の目的は、アクティブラーニングを取り入れたデザイン史教育プログラム（以降は、本プログラムと記載する）を作成し、2回の公開講座を実践した上でアンケート調査を分析して、本プログラムの有用性を確認し応用展開へとつなげていくことである。

デザイン史教育プログラムの実践に関する既往研究は、文献やWebサイトからは見つけることができなかった。八戸工業大学の紀要には、アクティブラーニングをテーマとした関係論文が複数発表されている。それらの詳細情報については、高屋ら³⁾2021『課題解決型のアクティブラーニング手法ーラッピングデザインのプロセスにおける教育実践ー』の記載に委ねる。

3. アール・ヌーヴォー様式とアール・デコ様式

「アール・ヌーヴォー」様式、「アール・デコ」様式の詳細内容については、デザイン史関連など多くの専門図書に委ねることとして、本論では割愛する。巻末に記載の参考図書やWebサイトなどを筆者らが調査研究、要約抜粋して、一般市民向けに分かりやすく纏めた説明用画面を制作した。その中から第1回、第2回共に12画面を選択して、図1, 2として下記に示す。同様の内容をハンドアウトとしてA4表・裏に印刷して、受講生に渡した。

3.1 アール・ヌーヴォー様式について

イギリスの産業革命により大量生産された粗悪品を問題視したウィリアム・モリスは、1875年モリス商会を立ち上げ、「アーツ・アンド・クラフツ」運動を推進する。モリスの目指した生活と芸術の統一は20世紀デザインの源流となり、彼が「モダンデザインの父」と呼ばれる所以である。モリスの得意とする植物文様や自由曲線の組み合わせによる装飾性などは、現代生活の中にも活かされている。100年以上前の「いちご泥棒」と名付けられた壁紙のパターンデザインが、近年では日本の100円均一ショップセリアから文具や小物として発売され、その商品群は大ヒットしている。

その流れを汲んだ「新しい芸術」を意味する美術運動、装飾様式が、19世紀末から20世紀初頭にかけてパリを中心に、「アール・ヌーヴォー」として開花する。花や植物など有機的で流麗な自然の曲線美をモチーフとして、鉄やガラスなど新素材を使用したことが特徴的である。現在も使用されているパリのメトロ（地下鉄）駅や、タッセル邸の螺旋階段などが代表作品とされる。「Art nouveau」は、「アール・ヌーヴォー」や「アール・ヌーボー」と表現されることが多いが、本論では文化庁の記載に合わせて「アール・ヌーヴォー」として記述する。

アルフォンス・ミュシャ まとも参考

- ・アール・ヌーヴォーの旗手、時代の寵児
- ・円形の枠+女性像、空間の連続的構成
- ・花と女、ミュシャの装飾宇宙、世界観

花：優しさ・繊細さ・優美さ・生命力の流れ
 女：優美で華やか、風になびく豊かな髪、流れる衣装
 春の気配、一瞬の美の開花、植物的生命力の化身

ミュシャ・スタイル

Menu

1 1: 氏名 (姓名・ニックネームもOK！)
2: 出身地 (適当でも可)
3: 今回の講座に参加したきっかけ

2 ・アール・ヌーヴォーについて
・ミュシャについて
・講座の感想など情報交換 本の鑑賞

3 ・カード記載 (キーワード・イラスト)
・写真撮影など

5分目安

↓

5分目安

↓

5分目安

図1 アール・ヌーヴォーについての資料

3.2 アール・デコ様式について

第1次世界大戦を挟んで1910年から1930年代に、パリからヨーロッパへ派生し、さらには大西洋を渡ってアメリカで流行したのが、「アール・デコ」のデザイン様式である。直線的で幾何学図形をモチーフとした装飾様式で知られ、機能的で実用的かつ合理的なデザインが特徴である。キュビズムの影響を受け、機械的なモチーフを使用しているともいわれ、その代表作が自動車のパーツを表現したと言われるニューヨークのクライスラービルである。

ジャポニズム〜ベル・エポック共創企画 第2回 2023年12月2日
デザイン史講座 八戸工業大学 高麗恵久子 三編者

アール・デコ
ART DECO

pi Volo
LAPERITIF
AUX VINS DE FRANCE

近代デザイン史を振り返る(情報版) Part1: 産業革命から第二次世界大戦まで

アール・デコ

- ・カッサンドルはアール・デコを代表するグラフィックデザイナー
- ・1910年代〜30年代、ヨーロッパやアメリカで流行
- ・直線的で幾何学図形をモチーフとした装飾様式
- ・機能的で実用的かつ合理的なデザインが特徴
- ・キュビズムの機械的なモチーフや空間表現

アドルフ・ムーロン
カッサンドル
Adolphe Mouron (1801-1968)

ノルマンディー

カッサンドル
アドルフ・ムーロン・カッサンドル

天才グラフィックデザイナー
鮮烈なインパクト、至高のグラフィック作品
300M超世界最大の巨大客船
1935年 88年前

ノール・エクスプレス
北方急行

立体感・幾何学的構成アール・デコの代表作
長距離国際寝台列車の先進性・ロマン
1927年 96年前

低い視点と右下を消失点とする極端な遠近法
奥行きと安定感のみごとな表現
エアラインによる光沢、近代化に生まれた機械への賛美
レールに誘われるパリ、ロンドンからリガ、ワルシャワの文字

ポスター・リトグラフ、
パツアトギャラリーコレクション蔵

Pivolo
ピヴォロ

ポスターに新たな美学
カッサンドル、1901年1月24日ウクライナ生まれ
父はポルドー出身のブルジョワ
1924年 99年前

ワインの「Pivolo (ピヴォロ) 」
「カササギが高く飛ぶ: "Pie vole haut" (ピヴォロ) 」の語呂合わせ
正方形を基本に等分線や対角線上に配されたモチーフ
オリジナルの文字が心地よい安定
言葉、文字、イメージなどのバランスが、かわいくもクールな一枚。
ポスター・リトグラフ、
パツアトギャラリーコレクション蔵



図2 アール・デコについての資料

3.3 アール・ヌーヴォー vs アール・デコ様式

二つのデザイン様式における代表的なポスターとその作者について、記載する。アール・ヌーヴォーの旗手と呼ばれる「アルフォンス・ミュシャ」と、アール・デコを代表する「アドルフ・ムーロン・カッサンドル」である。ミュシャの出世作 1894 年発表の演劇ポスター「ジスモンダ」は、当時の大女優サラを描いたリトグラフで細長い縦型 (216×74.2cm)、続く 1896 年発表の演劇ポスター「椿姫」も同様に細長い縦型 (207.3×76.2cm) 構図を用いており、これらの形式はジャポニスムの影響を受けたと推測されている。

一方カッサンドルの代表作は、全長 300 メートルを超す世界最大客船「ノルマンディー」と言える。巨大客船をあえて横位置ではなく正面下から見上げるようなアングルでとらえ、胡麻粒のように小さなカモメを配置することで、ノルマンディー号の巨大さを表現している。中心合わせの精緻な構図と三角図法を用いたポスターは、鮮烈なインパクトを持った至高のグラフィック作品とも称される。また北方急行「ノール・エクスプレス」は、長距離国際寝台列車の先進性やロマンを描き、その立体感や幾何学的構成はアール・デコの代表作にふさわしい。エアブラシの技法を用いて光沢感を出すなど、近代化によって生まれた機械への賛美を見事に表現している。

4. 公開講座プログラムの内容

4.1 デザイン史教育プログラム背景と実践について

青森県八戸市美術館が2021年11月3日に開館してから、2023年11月に2周年を迎え、3年目のスタートとなる11月4日から、「ロートレックとベル・エポックの巴里-1900年」展が大規模に開催された。展覧会と同時に「ジャポニズム～ベル・エポック共創企画スケジュール」として、市民向けのデザイン史講座2回が設定され、本学「デザイン史」授業を担当する高屋と授業補助担当の三嶋が講座を務めた。開催当日の搬入、搬出、展示、進行補助、写真撮影などを安部が担当し、音楽なども含めて五感で楽しむプログラムとして手がけた。

公開講座教育プログラムの作成にあたっては、中学での美術教育経験が長く一般市民への絵画教室を主宰する石毛と、本学「美術史」授業担当でワークショップ開催経験の豊富な皆川も加わり、本プログラムの構築にあたった。石毛と皆川は本学小中高大連携プロジェクト、安部は地域連携プロジェクトの中核をなすメンバーとして、本プログラムの作成と実践を共にしている。

4.2 プログラムの特長

本プログラムの特長は、座学とミニワークショップを融合させることで、年齢を問わず広く一般市民に参加しやすく楽しんでもらえることを主眼とした。また八戸市美術館のジャイアントルームを会場としており、セミナールームのような閉ざされた教室空間ではなく美術館の開放的な吹き抜けのエントランス空間であり、講座への参加者だけではなく通行人も考慮して会場構成を考えた。開催日決定後は美術館へ下見に赴き、講座の企画責任者や美術館の学芸員らと相談しながら、テーブル配置やプロジェクターの上映設備、音響設備について計画を立てた。

本プログラムは大きく前半と後半の2部構成となっている。前半60分の座学では、挨拶に続き、まずは導入クイズで集中力を高める効果を狙う。次にデザイン史の概要説明PP、動画と続き、アール・ヌーヴォー、アール・デコのポスター説明では、印刷したポスターとPPを見せながらの詳細説明となる。白い仕切り壁面(8m×2m程度)中央には、高輝度の大型プロジェクターによる画面投影、その両サイドには左にポスター2点、右にポスター3点が貼られ、美術館内の通行人らにも内容がわかるよう、開かれた美術館として興味を持ってもらえる仕掛けの一つとした(写真-1)。立ちどまって、あるいは後方の長椅子に掛けて動画を見たり、説明を聞く姿も多く見受けられた。

後半の30分は、テーブルトークと題してミニワークショップを行った。最初からワークショップ開催と謳った場合、参加者らが引いてしまい心理的安全性が損なわれることも考慮して、簡単なアイスブレイクと説明した。第1回ではアイスブレイクと、アール・ヌーヴォーに関する意見交換を、第2回ではアイスブレイクに加えて、アール・ヌーヴォーvsアール・デコの比較表を作成した。

この2部構成は、座学だけでは知識が流れてしまい身につかないことから、アクティブラーニングを取り入れたものである。「主体的な体験を積み重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである」文部科学省中央教育審議会答申の言葉を真摯に受けとめて、筆者らが大学教育および授業内でも実践していることである。



写真1 第1回公開講座の様子



写真2 第2回公開講座比較表作成の様子

4.3 プログラムの内容

デザイン史教育プログラムの流れを、表1、表2に示す。時間配分と、内容、主な準備物も合わせて記載した。詳細については、アンケート評価と共に第5章で述べることとする。

4.4 実践1回目 (アール・ヌーヴォー デザイン史講座)

表1に実践1回目の主な流れと準備物について示す。主な流れとしての特徴的な内容としては、挨拶・自己紹介の際に、参加者にさらに興味を示してもらうために、アール・ヌーヴォーに関する簡単なクイズを行った。その上で、アール・ヌーヴォーの解説へと入っていった。また、写真1にも示すが、パワーポイント投影による解説だけではなく、投影位置の両脇に、今回のテーマとしたアール・ヌーヴォーの特大大ポスターを貼り、前面のコーディネートをしたことが特徴的な点である。

プログラムの中で、デザイン解説に関しては、講師によるパワーポイントでの説明を行った上で、動画での解説を導入し変化を持たせることによって、ハイブリッドな解説としたところも、プログラム構成の大きな特徴となっている。更に、主な準備物の中に、スピーカーが入っているが、今回のプログラムは「五感で学ぶ」内容とし、視覚で学ぶだけではなく、聴覚も用いて学ぶために、アール・ヌーヴォーや、アール・デコ時代関連の音楽をBGMとして流すことによって、雰囲気にも工夫を持たせた。

表1 実践1回目の主な流れ

13:00	準備	<主な準備物> ・PC (パワーポイント) 電源、コネクター、指棒 ・ポスター5枚 (虫ピン・アタッカー・糸) ・クイズ用パネル3枚 ・アクリルメニュー表 ・記入カード (アール・ヌーヴォー調)、マーカー・サインペン ・アンケート・ハンドアウト ・参考書籍・スピーカー
14:10	スタンバイ	
14:30	ご挨拶、自己紹介、クイズ	
14:40	動画での解説	
14:45	デザイン史の概要、イギリスの産業革命から160年余り アーツ&クラフツ → アール・ヌーヴォー → アール・デコ	
15:00	ポスターの作品解説 2分×5枚 キャプションPP	
15:15	まとめ、八戸ブックセンターからのご案内	
15:20	テーブルトーク、カード記載、写真撮影、質問タイム	
15:55	ご挨拶、感謝	
16:00	終了	

4.5 実践2回目 (アール・デコ デザイン史講座)

第1回目を踏まえて、第2回目はブラッシュアップを行い、テーブルトークとともに、「4.2 プログラムの特長」でも述べたが、アール・ヌーヴォーvsアール・デコの比較表を作成した。(写真2) 比較表をグループで制作することによって、アクティブラーニングとしての効果も高まり、一方的な講義形式の内容ではなく、アール・ヌーヴォーとアール・デコに関して参加者が能動的に考え、グループで比較表を制作することによって理解を深める機会となった。この取り組みに関しては、参加者からも好評を得た。

以上から、公開講座にもアクティブラーニングの要素を積極的に取り入れていくことが重要であると認識した。

表2 実践2回目の主な流れ

13:00	準備	<主な準備物> ・PC (パワーポイント) 電源、コネクタ、指棒 ・ポスター5枚 (虫ピン・ アタッカー・糸) ・クイズ用パネル3枚 ・アクリルメニュー表 ・ヌーヴォーVSデコ比較 表 (模造紙)、マーカー・ サインペン ・アンケート ・ハンドアウト ・参考書籍 ・スピーカー
14:10	スタンバイ	
14:30	ご挨拶、自己紹介、クイズ	
14:35	デザイン史の概要、イギリスの産業革命から160年余り アーツ&クラフツ → アール・ヌーヴォー → アール・デコ	
14:45	動画での解説	
14:50	ポスターの作品解説 2分×5枚 キャプションPP	
15:00	アール・ヌーヴォー vs アール・デコ 建築・ポスター・街・人・アクセサリ・ガラス	
15:15	まとめ、八戸ブックセンターからのご案内	
15:20	テーブルトーク、比較表制作、写真撮影、質問タイム	
15:45	グループ発表 2分×5G=10分	
15:55	ご挨拶、感謝	
16:00	終了	

5. アンケート調査と振り返り

2回の公開講座では内容を振り返ると共に、本プログラムの有用性を確かめるために、アンケート調査を実施した。アンケート内容は写真3の通りで、無記名式とした。以下、回答結果について記載する。



写真3 アンケートの回答

5.1 参加者について

第1回目の参加者は16名、第2回目の参加者は20名であった。

1回目は、男性4名女性12名と男女比1:3の割合であった。2回目は、男性3名女性17名と女性が全体の85%を占めた。

参加者の年齢については、第1回目は50代が7名、20代と30代が共に3名、60歳以上が2名、40代が1名であった。第2回目では、50代が7名、40代が4名、30代と60歳以上が共に3名となった。また20代が2名、10代が1名の参加となった。

続いて、参加者の住んでいる地域についての結果について記載する。第1回目では、八戸市内から11名、青森県内からは5名の参加となった。第2回目は、八戸市内から18名、青森県内から2名の参加となった。第1回目、第2回目ともに参加者すべての人が青森県内からということが分かった。また、公開講座2回目の参加者の中で1回目の講座にも参加した人は20名中9名であり、約半数が2回連続して受講したことが分かる。

5.2 講座を知ったきっかけ

講座を知ったきっかけとしては、ポスター・チラシや家族・友人・知人からが1回目・2回目ともに大きな割合を占めている。その他の回答としては、街かどミュージアム、広報はちのへをきっかけに講座を知った人もいた。

5.3 印象に残ったこと

公開講座では、参加者がより親しみやすく楽しくデザイン史について学べるように「クイズ」「動画」「ポスター解説」「テーブルトーク・比較表作成」等を行った。その中で印象に残ったことを複数回答で尋ねた結果が、図3、図4である。得票多数の順で第1回のアンケートでは、「ミュシャのポスター解説」7票、「テーブルトーク」6票、「デザインの概要」と「デザインの歴史(動画)」が5票という結果になった。第2回のアンケートでは、「アール・ヌーヴォーvsアール・デコ」12票、「テーブルトーク・比較表作成」11票、「デザイン史の概要(解説)」10票という結果となった。2回のアンケート結果から、「テーブルトーク・比較表作成」などのアクティブラーニングは、参加者にとっては得票数が高く、より効果的だったといえる。特に、第2回の公開講座での比較表作成はグループ内での合同作業による主体的な解決・教え合いにより、学習の関心・意欲が向上できた。

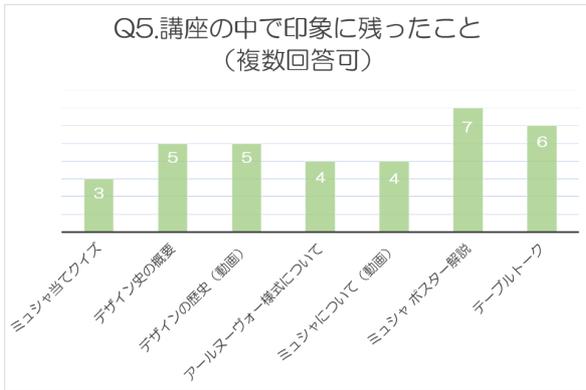


図3 第1回目のアンケート結果

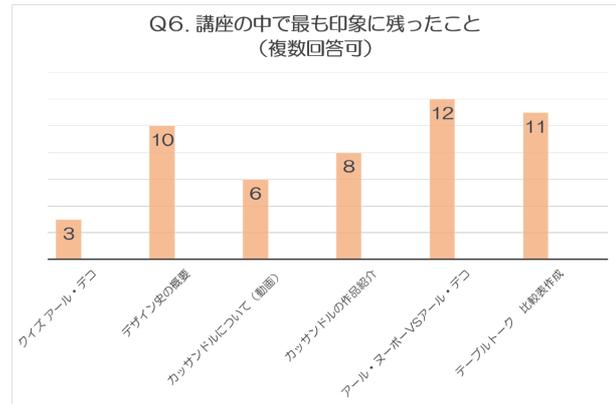
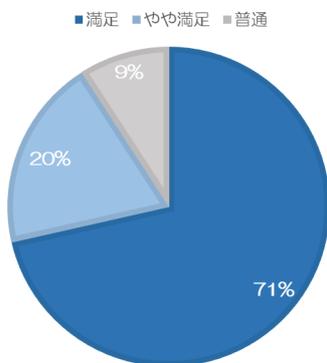


図4 第2回目のアンケート結果

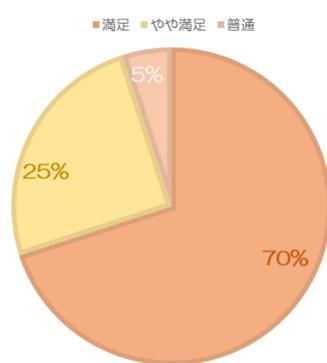
5.4 満足度について

公開講座の満足度についても、アンケートによる調査を行った。第1回目では「満足」と回答した人が16人中11人、「やや満足」と答えた人が3人であった。第2回目のアンケート結果では「満足」と答えた人が参加者20人中14人、「やや満足」と答えた人が5人であった。1回目、2回目ともに参加者全体の9割以上の方が公開講座を満足してもらえ結果を得た。また、「満足」と「やや満足」を合わせた割合は、1回目87.5%、2回目95%となり2回目の方が、アクティブラーニングの内容が濃厚で、時間も多く設けたことが功を奏していると考えられる。



満足…11人 やや満足…3人 普通…2人

図5 第1回目の満足度



満足…14人 やや満足…5人 普通…1人

図6 第2回目の満足度

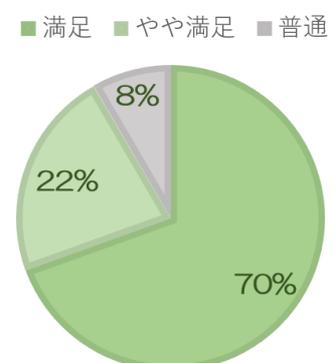


図7 満足度の合計

5.5 その他の感想・意見

公開講座について自由記述による感想では、「途中で動画を観たり、とてもテンポが良くて楽しくデザインを学べました。」「アクティブラーニングで初対面の方とも楽しく深く学ぶことができました。」といったような評価の声を、多くもらうことができた。参加者の意見では「八戸、県内でももっともっと開催して頂きたいです。」といった声もあった。アンケート結果から、アクティブラーニングの有効性が実証されたと考える。また、参加者同士の交流から新しいコミュニティの形成につながったり、自分の視野や考え方を広げるきっかけになったりと生涯学習の可能性も感じられた。

6. 中学校美術科鑑賞教材の提案

6.1 題材名

「ジャポンからひらめきを得たー浮世絵からアール・ヌーヴォーへー」 時間数：2 時間

6.2 題材設定の理由

中学校美術科鑑賞授業において、「ジャポニスム」は定番ともいわれる教材になっており、『美術 2・3 上』2021 年 日本文教出版 をはじめ、ほとんどの教科書に関連作品が掲載されている。一方、「アール・ヌーヴォー」という言葉は、同じ『美術 2・3 上』の年表のページに登場する程度で、詳細には触れられていない。アール・ヌーヴォー様式には絵画やグラフィックデザイン、工芸、建築まで、幅広いジャンルがあり日本でも根強い人気があるが、この様式の誕生に日本の美術が大きな影響を与えていることはあまり知られていない。

中学校美術科学習指導要領 B 鑑賞(1)イ(イ)には、「日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、伝統や文化のよさや美しさを感じ取り愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気づき、美術を通じた国際理解や美術文化の継承と創造について考えるなどして、見方や感じ方を深めること。」とある。我が国は古くから多くの異文化を吸収、咀嚼しながら風土や生活に合わせて洗練していくことで独自の文化を生み出してきた。その独自の文化のよさを十分に味わい理解させ、自国の文化のよさを説明したり他国の文化を共感的に理解したりできるようになることは、新たな価値や文化を創造していこうとする気持ちをもたせるためにはとても大切なことである。

本題材は、江戸時代の浮世絵と西洋の美術作品を対比して鑑賞し、ジャポニスムについて学ぶ。そこで日本の美術文化を見直すとともに、異文化交流によって新しい芸術が創られていくということを知ることができる。浮世絵が印象派の画家たちにひらめきを与え、また、当時の万国博覧会に出品された日本の美術・工芸品がアール・ヌーヴォー様式を生み出すきっかけとなり、西洋美術に様々な形で取り込まれていった。浮世絵やそれらの作品について学ぶことで、生徒が日本の美術を誇りに思うと同時に、西洋美術をより身近に感じることができると考え、この題材を設定した。

6.3 学びの目標

学びの目標を下記の 3 点に設定する。

(1)浮世絵と西洋絵画の比較鑑賞

浮世絵と西洋絵画を比較鑑賞することで浮世絵の特徴である、大胆な構図や色彩表現、線の強弱による表現の工夫などを理解する。

(2)アール・ヌーヴォーについて

アール・ヌーヴォーが、日本美術の表現様式の特徴である植物的な曲線模様、有機的な形体、アシンメトリーのレイアウト、陰影を排除した平面的表現の影響を受けていることを理解する。

(3)東西美術の交流

ジャポニスム、アール・ヌーヴォー、東西美術の交流について理解し、日本の伝統的な美術のよさを味わう。

6.4 学習の流れ

活動内容	指導者の働きかけ	留意点及び評価方法など
導入 20分 ①ゴッホと広重の作品を比較鑑賞する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴッホの『雨の大橋、広重作品模写』を鑑賞させる。 ・教科書でゴッホの作品であることを確認し歌川広重の『名所江戸百景 大はしあたけの夕立』を紹介する。 ・ゴッホと広重の作品を比較鑑賞することで、生徒たちに「なぜ、ゴッホは浮世絵を模写したのだろうか?」という問いが生まれる。これを、浮世絵鑑賞を貫く問いとして探究活動を行わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作者名と題名を伏せて提示し、鑑賞させる。 ・作品の印象などを全体のイメージや浮世絵の作風などをとらえさせることに留意する。 <p>○発言内容、ワークシートの記述</p>
展開1 30分 ②西洋絵画と浮世絵を比較鑑賞し、それぞれの表現の特性に気付く。	<ul style="list-style-type: none"> ・問いをつかんだ生徒は、比較鑑賞を通して、浮世絵だけを見ていても浮世絵らしさが見えてこないことに気付く。そこで、ワークシートで浮世絵の造形的な表現の特徴を、西洋絵画と比較して追求する活動を行わせる。 ・つかんだ西洋の表現の特徴を、ワークシートに自分なりの言葉でまとめさせ周囲と共有させる。 ・浮世絵の造形的な特徴を確認しながら多くの浮世絵を比較鑑賞することで大胆な構図や色彩表現、線の強弱による表現の工夫など、具体的な視点から追求活動を行わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の思考の流れ（興味・関心）に沿った必然的な展開になることがポイント。 ・比較鑑賞は単に西洋絵画と浮世絵を比較するのではなく、人物の表現や顔の表現、景色や波の表現、風景や雲などの表現といったような具体的な鑑賞の視点に生徒が気付けるように作品を選択することに留意する。 ・ゴッホが魅了された浮世絵の表現の特徴を共感的に理解できるようにする。 <p>○鑑賞の様子、発言内容、ワークシート</p>
展開2 40分 ③西洋と日本の作品を比較鑑賞し、日本美術の表現様式の特徴に気づき、ジャポニスムを理解する。 ④アール・ヌーヴォーの誕生に日本美術が影響を与えていたことを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の授業を振り返り浮世絵の造形的な特徴を確認。 ・参考作品を鑑賞し日本美術の表現様式の特徴である、植物的な曲線模様、有機的な形体、アシンメトリーのレイアウト、陰影を排除した平面的表現について学ぶ。ジャポニスムの理解につなげる。 ・参考作品：『接吻』『紅白梅図屏風』、『ムーラン・ルージュ・ラ・グリユー』、『大谷鬼次の奴江戸兵衛』、『ローズ：4つの花』、『浅草山之宿仮宅 佐野鶴屋内 佐川』、『鯉文花器』、『北斎漫画 魚鑑観世音』、『蜻蛉形小テーブル』、『蜻蛉の精』、『北斎漫画 昆虫』を比較鑑賞しアール・ヌーヴォーが日本の美術・工芸品から受けた影響をつかみ取らせる。 ・アール・ヌーヴォー様式は絵画やグラフィックデザイン、工芸、建築など様々な分野に及んでおり、それぞれが日本美術の影響を受けていることを理解させる。 ・気付いたことをワークシートにまとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参考作品には、浮世絵、北斎漫画、工芸品などから日本美術の表現様式の特徴をよく表しているものを複数用意しておく。 ・日本の参考作品はなるべく教科書・資料集から引用する。生徒にもなじみがあるものを選ぶことで理解を助ける。(クリムト、尾形光琳、ロートレック、東洲斎写楽、溪斎英泉、エミール・ガレ、葛飾北斎) ・アントニオ・ガウディー『サクラダ・ファミリア聖堂』を紹介し、建築にもアール・ヌーヴォー様式があることも付け加える。 <p>○鑑賞の様子、ワークシート</p>
まとめ 10分 ⑤学習の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの活動を振り返らせながら日本の美術・工芸品のよさや美しさを自分なりにまとめるだけでなく、第三者に伝えるプレゼンテーションを行わせる。 ・日本美術の豊かさ（日本の文化）を伝える立場に立つことで、文化の担い手として、あるいは文化の継承者としての自覚を高める 	<ul style="list-style-type: none"> ・杉浦非水『三越呉服店 春の新柄陳列会』を紹介し、アール・ヌーヴォーがその基になった日本に還ってきたことを補足。東西美術の交流について考えさせる。 <p>○プレゼンテーション、ワークシート</p>

7. まとめ

近代デザイン史の二大エポックと言える、アール・ヌーヴォーからアール・デコ時代の影響を受けた建築や室内装飾、美術品から生活用品、ポスターなどは現代でも息づいており、ファンも多い。本研究は、市民向けデザイン史公開講座にアクティブラーニングの要素を取り入れて教育プログラムを構築し、2回の実践とアンケート結果などから有効性を検証し、応用展開の可能性を考察したものである。

主に次の3点の結果が得られたことを、まとめて記載する。

1. アクティブラーニングの有効性が、アンケート結果により実証された。第1回より、第2回の方が、共に学び作業する内容と時間を増やしたことによる、効果が大きかった。
2. 開かれた美術館での公開講座は、デザイン史に関連する美術品が展示された近くで、その空気感を感じながら学び、振り返ることが出来て有益であった。美術館内での通りがかりの人らも、ベンチに腰掛けて興味深げに説明を聞いたり、動画を見たりする姿があり、エンターテインメント参加者以外にも開かれた公開講座となった。冒頭のクイズ問題では、近くで自習していた高校生らが手を上げて参加してくれ、八戸市美術館のジャイアントルームならではの会場が良き結果をもたらしたと言える。開かれた地域の美術館としての目的達成にもつながった。
3. 一般市民向け公開講座教育プログラムを基盤として、中学校美術科鑑賞教材への応用展開の可能性が見出せ、日本の美術や文化を理解しながら日本人としてのアイデンティティ教育にもつながる考察を得た。

謝 辞

本デザイン史教育プログラムの実践にあたり、市民講座を企画開催いただいた八戸街かどクリニック、八戸市美術館、八戸ブックセンターなど関係各位に心からのお礼を申し上げたい。また、第1回と第2回デザイン史講座への参加者、八戸工業大学感性デザイン学部教職員、参加学生にも謝意を表したい。

参考文献

- 1) 浦上 慎一・成田 秀夫：アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習，東信堂，2018
- 2) 安永 悟・関田 一彦・水野 正朗：アクティブラーニングの技法・授業デザイン，東信堂，2016
- 3) 高屋喜久子・宮腰直幸・高橋史朗：課題解決型のアクティブラーニング手法ーラッピングデザインのプロセスにおける教育実践一，八戸工業大学紀要第40巻，pp.93-101，2021
- 4) 暮沢剛巳・伊藤潤・山本政幸・天内大樹・高橋裕行：デザインの歴史，学芸出版社，2022
- 5) 阿部公正：世界デザイン史，美術出版社，2020
- 6) デイヴィッド・ライマー：ポスター芸術の歴史ーミュシャ、ロートレックからシュルレアリスムまで一，原書房，2020
- 7) 千足伸行：もっと知りたいミュシャー改訂版 生涯と作品一，東京美術，2019
- 8) 海野弘：アルフォンス・ミュシャの世界ー2つのおとぎの国への旅一，パイインターナショナル，2016
- 9) 堺アルフォンス・ミュシャ館編：アール・ヌーヴォーの華 アルフォンス・ミュシャー代表作から知られざる初期作品、習作まで一，講談社，2020
- 10) ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館・ギレーヌ・ウッド編：アール・デコ展ーきらめくモダンの夢 1910-1939，読売新聞社，2005

- 11) ざっくり振り返る！デザインの約 160 年の歴史について知ろう-近代デザイン篇-
https://hataraku.vivivit.com/design-knowledge/designhistory_modern201712/ (2023 年 11 月 16 日アクセス)
- 12) プラハ・ミュシャ美術館
<https://www.mucha.cz/jp/> (2023 年 11 月 16 日アクセス)
- 13) 堺アルフォンス・ミュシャ館
<https://mucha.sakai-bunshin.com/> (2023 年 11 月 16 日アクセス)

要 旨

18 世紀後半イギリスの産業革命に始まったとされる近代デザイン史は、160 年余りの歴史を有する。アーツ&クラフツ運動に始まり 19 世紀末デザイン様式としてパリで華開いたアール・ヌーヴォー、続く 20 世紀モダンの象徴として芽吹いたアール・デコは、二大エポックを成したと言える。本研究は、八戸市美術館の市民向け公開講座として実践した、第 1 回アール・ヌーヴォー (2023 年 11 月 4 日開催)、第 2 回アール・デコ (12 月 2 日開催)、これら 2 回のデザイン史教育プログラムについて、アクティブラーニングを取り入れた内容構築とその実践、およびアンケート結果から見られる効果について論じると共に、デザイン史教育プログラムの展開について考察するものである。

キーワード : デザイン史, 教育プログラム, アール・デコ, アール・ヌーヴォー, 八戸市美術館